調査報告

トロス司教座聖堂発掘報告（二〇一六）
―出土貨幣及び封鉛について[1]

村田光司

キーワード
古代末期　ビザンツ　トロス　貨幣　封

二〇一六年夏に行われた聖堂発掘作業では、南側廊（SA）より六枚、身廊（Nave）より一枚、南翼廊（ST）の第六室より二枚の、合計九枚の貨幣が、また第六室と第七室よりそれぞれ一枚ずつ封鉛[2]が出土した。本稿ではこれらの内容を報告し、若干の技術的検討を行う[3]。

（一）貨幣

①銀貨（Siliqua）、ウァレンティニアヌス二世治世（三七五―三九二年）（写真1a, 1b）

史苑（第七八巻第二号）

・出土場所　一五号墓（南側廊）
・直径　一七㎜

写真1a　表面

写真1b　裏面

・重量　三・一g
・型打ち軸　〇度
・造幣地　リヨン、トリーアないしアクィレイア
・造幣年　三七八―三八三年

表面

右を向き、冠をかぶり、なんらかの衣装をまとう皇帝の胸像。頭部左上に「LEN」の三文字が確認され、次の銘文の一部であると想定される。[4]

[DNVA]LEN[TINIANVSIVNPFAVG]

[D(ominus) N(oster) Va]len[tinianus Iun(iores) P(ius) F(elix) Aug(ustus)]

「我らが主ウァレンティニアヌス、敬虔にして幸運なる年少のアウグストゥス」

裏面

都市コンスタンティノープルを神格化した表象が見える。正対して座し、右を向き、右手脇に小塔を備え、右手に笏を持つ。右足は舳先の上に乗せられている。周縁の銘文はかすれて読み取ることができない。

貨幣の表面から見て左縁は削れており、右側は三日月状に腐食している。裏面の意匠は、現在のところ三七八―三八三年の間の、リヨンとトリーア、アクィレイア産のものにしか確認されていないものであり、既存の事例に照らせば裏面の銘文は「CONCOR - DIA AVGGG」、つまり「Concordia Aug(ustii)」（三人の皇帝たちの調和）であったと推測される。[5] この時期の皇帝で、表面に見える「LEN」の三文字を持つ人物はウァレンティニアヌス二世のみである。[6]

②青銅貨（AE3）、三六四―三七五年（写真2a, 2b）

写真2a　表面　　写真2b　裏面

・出土場所　一五号墓（南側廊）
・直径　一三㎜

・重量　一・九g
・型打ち軸　一八〇度
・造幣地　アンティオキア
・造幣年　三六四―三七五年

表面
右を向き、真珠の冠をかぶり、なんらかの衣装をまとう皇帝の胸像。銘文を読み取ることは出来ない。

裏面
右を向いて前進し、右手で捕虜を引き立てる皇帝の立像。下部に造幣地記号「ANT」。銘文は読み取れない。

裏面から見て右縁に大きな削れが確認できる。裏面下部に見える造幣地記号はアンティオキアを指すが、四文字目に期待される工房番号は不明である。アンティオキア産で裏面にこのタイプの意匠を持つのは、三六四―三七五年の青銅貨（AE3）で、ウァレンティニアヌス一世、ウァレンス、グラティアヌスの三皇帝のいずれかのものである。裏面の銘文は「GLORIARO - MANORVM」つまり「Gloria romanorum」（ローマ人の栄光）であり、皇帝は左手に軍旗を握っていたと推測される。[7]

③青銅貨（AE2）、三八三―三八八年（写真3a, 3b）

写真3a　表面

写真3b　裏面

・出土場所　二五号墓（南側廊）
・直径　一五―一八㎜
・重量　一・六g
・型打ち軸　〇度
・造幣地　コンスタンティノープル
・造幣年　三八三―三八八年

表面
右を向き、真珠の冠をかぶり、衣装をまとう皇帝の胸像。周縁の銘文の一部が読み取れる。

[D]N[...?...]? VSPFAVG

[D(ominus)] N(oster) [...?...]us P(ius) F(elix) Aug(ustus)

「我らが主…ス、敬虔にして幸運なるアウグストゥス」

裏面

右を向いて立つ皇帝。右手に旗（labarum）、左手に球を持ち、左足（?）を捕虜の上に乗せている。下部に造幣地記号「[C]ONS[A または Δ]」。周囲の銘文の一部が読み取れる。

[VIRTVSE]XERCITI

[Virtus E]xerciti

「軍隊の勇気」

表面の左縁は削れており、銘文の皇帝名は明確ではない。裏面の意匠、銘文、造幣地記号などから、三八三―三八八年にコンスタンティノープルで造幣された青銅貨（AE2）と考えられる。このタイプはウァレンティニアヌス二世、テオドシウス一世、アルカディウス、マクシムスの四名のものが確認されているが、我々の貨幣とまったく同一と思われる類例は見あたらない。[9] 表面の銘文のうち、皇帝の頭の右上あたり、「VS」の直前に「I」「M」ないし「N」の右部分と思われる垂直の線が見えることから、皇帝名の語尾は「-IVS」「-MVS」「-NVS」のいずれかである。従って四名の皇帝名のいずれも可能性があるものの、「アルカディウス」と「マクシムス」の文字数は表面周縁のスペースを十分に満たさない。従って、ウァレンティニアヌス二世かテオドシウス一世の貨幣である可能性のほうが高いと考えられる。

④銅貨（half follis）、フォカス治世（六〇二―六一〇年）（写真 4a, 4b）

写真 4a　表面

写真 4b　裏面

・出土場所　身廊の最も東側四分の一の部分、床上レベル

・直径　二二―二四㎜

・重量　五・八g

・型打ち軸　〇度
・造幣地　コンスタンティノープル
・造幣年　六〇三―六一〇年

表面

正面を向いた皇帝の胸像。執政官のローブをまとい、（十字のついた）冠をかぶっている。右手に布（mappa）を、左手に十字架を握っている。銘文は次の通り。

DNFO[CAS PER]PAVC
D(ominus) N(oster) Fo[cas Per]p(etuus)
Aug(ustus)
「我らが主フォカス、永遠のアウグストゥス」

裏面

中央に「二〇（ヌムス）」を示す「XX」。上部中央に星のマーク。下部に造幣地記号「[C]ONA」。

皇帝フォカス治世の二〇ヌムス銅貨、いわゆる半フォリス貨である。フィリップ・グリアースンの分類によれば、この貨幣はコンスタンティノープルの第一工房で六〇三―六一〇年に造幣された「Class 2(b)」に相当する。[10]

史苑（第七八巻第二号）

⑤青銅貨（AE3）、コンスタンティウス二世治世（三三七―三六一年）（写真5a, 5b）

写真5a　表面

写真5b　裏面

・出土場所　第六室
・直径　一七㎜
・重量　一・九g
・型打ち軸　一八〇度
・造幣地　アンティオキア
・造幣年　三五五―三六一年

表面

冠をかぶり衣装をまとい、右を向いた皇帝の胸像。周縁に次の銘文が見える。

DṆCONSTAN [TIVSPFAVG]
D(ominus) N(oster) Constan[tius P(ius) F(elix) Aug(ustus)]
「我らが主コンスタンティウス、敬虔にして幸運なるアウグストゥス」

裏面

上方に、左を向いた兵士の全身。左手に盾を持ち、右手は槍をもって落馬した騎手を突いている。下方には兵士のほうを向いて仰け反る騎手と、その下に馬が見える。右下には盾が落ちている。

槍の左側に「M」の記号、下縁に造幣地記号「ANA」（アンティオキアの第一一工房）、周縁に次の銘文が見える。

ḞELTEMP ṚEPARA[TIO]
Fel(ix) Temp(orum) Repara[tio]
「時代の幸福なる再建」[1]

三五五年から三六一年のあいだにアンティオキアの第一一工房で製造された、コンスタンティウス二世の青銅貨（AE3）である。[2]

⑥青銅貨（?）（写真 6a, 6b）

写真 6a　一面

写真 6b　反面

・出土場所　第六室
・直径　十二―一五㎜
・重量　一・〇g（半欠け）
・型打ち軸　不明
・造幣地　不明
・造幣年　不明

半欠けで、両面ともに判読不能である。

⑦銅貨（Tetarteron）、アレクシオス一世治世（一〇八一―一一一八年）（写真7a, 7b）

写真7a　表面

写真7b　裏面

・出土場所　南側廊の東側
・直径　二一―二二㎜
・重量　一・九g
・型打ち軸　〇度
・造幣地　テッサロニキ
・造幣年　一〇九二／三―一一一八年

表面

装飾された正十字が、二つの段の上に乗っている。左腕の先端に大きな球が一つと小さな球が二つずつ見える。十字で分かたれたスペースに「C」（左上）、「アルファ」の下半分「M」（左下）が確認できる。

裏面

正面を向いた皇帝の胸像。装飾された衣装（loros）の一部と、球を持った左手が判別できる。顔の両脇にあったと思しき銘文は読み取ることが出来ない。

一〇九二／三年にアレクシオス一世の幣制改革によって導入された新銅貨（テタルテロン銅貨）である。意匠から判断して、テッサロニキで造幣されたものの一種である。[13] 表面の摩耗した右半分には「Φ」（右上）と「Δ」（右下）が、裏面には「TΩK O MNH」の文字があったことが想定され、可読部分と併せて次のようになる。

Σ(ταύρε) Φ(ύλαττε) Α(λέξιον) Δ(εσπότην) τῷ Κομνη(νῷ).

「十字架よ、主たるアレクシオス・コムネノスを守り給え」

⑧青銅貨（?）（写真8a, 8b）

写真8a　一面

写真8b　反面

・出土場所　南側廊の中央
・直径　一二㎜
・重量　〇・八g
・型打ち軸　不明
・造幣地　不明
・造幣年　不明

判読不能。

⑨青銅貨（AE2）、コンスタンティウス二世治世（三三七―三六一年）（写真9a, 9b）

写真9a　表面

写真9b　裏面

・出土場所　南側廊、一五墓周辺
・直径　二四―二六㎜
・重量　四・七g
・型打ち軸　二〇度
・造幣地　コンスタンティノープル
・造幣年　三四八―三五一年

表面

冠をつけ衣装をまとい、右を向いた皇帝の胸像。周縁に次の銘文が見える。

DNCONSTAN TIVSPFAVG
D(ominus) N(oster) Constantius P(ius) F(elix) Aug(ustus)
「我らが主コンスタンティウス、敬虔にして幸運なるアウグストゥス」

裏面

上方に、左を向いた兵士の全身。左手に盾を持ち、右手は槍をもって落馬した騎手を突いている。下方には馬と、その首の上に倒れる騎手がおり（顔は馬のほうを向いている）、右下には盾が落ちている。

槍の左側に「Γ」の記号、下縁に造幣地記号「CONSA ＊」（コンスタンティノープルの第一工房）、周縁に次の銘文が見える。

FELTEMPRE PARATIO
Fel(ix) Temp(orum) Reparatio
「時代の幸福なる再建」[14]

三四八年から三五一年のあいだにコンスタンティノープルの第一工房で製造された、コンスタンティウス二世の青銅貨（AE2）である。[15]

（二）封 Seal

①封鉛（写真 10a, 10b）

写真 10a　表面

写真 10b　裏面

・出土場所　第六室、床上レベル
・直径　縦二四㎜、横一六㎜
・重量　五・〇g

表面

...R|....ωC,|....N̄R'|....Ṣ'Ẹ|....V|....

裏面

·　+S'..|OT,N..|API....|MAT...|VRЄ...|
OTO.|-+-

[+K(ύρι)ε]　β[οή]θ(ει)　τ[ῷ　σ[ῷ　δ(ούλῳ)
Κω]ν(σταντίνῳ)　β(ασιλικῷ) [...] (καὶ) ε[...]ν[...]
(καὶ) [πρ]οτ(ο)γ[οτ]άρι[ῳ τ(οῦ) θε]μάτ[ο(ς) τ(ῶν)
κ]υβε[ρνι]οτο[ν]

「主よ、汝の僕たるコンスタンティノス、皇帝の[…]、そしてテマ・キビュライオタイのプロトノタリオスを救い給え」

両面とも六行の銘文で構成され、裏面下部には「+」の飾りが見える。状態の悪さから、表面の復元案は限定的なものに留まる。表面の三行目最後の「R=β(ασιλικῷ)」から表面最後の文字までは、二つの爵位、ないしは爵位と役職が一つずつ刻まれていたことが想定されるが、確実な断定を可能にする材料をなお私は持ち合わせていない。[17] 一方で裏面にみえる銘文からは、この封鉛が二〇一三年度に出土した封鉛同様、テマ・キビュライオタイの役人、プロトノタリオスのものであることが判明する。[18] この封鉛に記されたコンスタンティノスは、二〇一三年出土封鉛に現れる同じ官職を持つ人物と同名であるが、両者が同一人物のものであるかどうかは、印章の型が別のものである上、よくある名前であることから即断はできない。

使用されている字形から判断するならば一〇―一一世紀のもの。

②封鉛　未使用（写真 11a, 11b）

写真 11a　一面

写真 11b　反面

・出土場所　第七室
・直径　二一㎜
・重量　六・四g

印章を打刻する前の、未使用の鉛である。二〇一四年度にも未使用の鉛が一点出土しているが、それに類似した大きさと重量である。[19]

註

（1）後続の註において以下の略号を用いる。RIC = The Roman Imperial Coinage. Vol. VIII: *The Family of Constantine I, A.D. 337-364, by* J. P. C. Kent, (London, Spink & Son, 1981); Vol. IX: *Valentinian I - Theodosius I,* by J. W. E. Pearce, (London, Spink & Son, 1951).

（2）二〇一三、二〇一四年度の発掘報告（『史苑』七四―二、七五―二を参照）では、いわゆる「Seal」の訳語として「封緘」の語をあてていたが、今後「Seal (impression)」一般を指す場合は「封」、「Lead seal (impression)」を指す場合は「封鉛」と改める。

（3）出土コンテクストについては浦野聡「東方における聖堂と社会―リキア西部トロス教会主教座聖堂をめぐって」浦野編『古代地中海の聖域と社会』（勉誠出版、二〇一七年）、三三九―四〇一頁。

（4）あるいは、「[DNVA]LEN[TINIANVSPFAVG]」。

（5）RIC IX, p. 25: no. 55(a) (siliqua, Trier); p. 29: no. 72(AE4, Trier); p. 47: no. 24(siliqua, Lyon); p. 99: no. 25(siliqua, Aquileia).

（6）ただし、RIC にはこの貨幣のパラレルは報告されていない。

（7）この貨幣タイプの絞り込みは浦野教授による。類例は RIC IX, p. 274: no. 10; p. 281: no. 35(Aes III, Antiochia).

（8）「I」、「M」、「N」のいずれか。

（9）RIC IX, p. 233: no. 83(a) - (b).

（10）Philip Grierson, *Catalogue of the Byzantine Coins in the Dumbarton Oaks Collection and in the Whittemore Collection*, vol. II, (Washington D. C., Dumbarton Oaks Research Library and Collection, 1968), pp. 167-168: no. 37a. Cf. Wolfgang R. Hahn, *Moneta Imperii Byzantini: Rekonstruktion des Prägeaufbaues auf synoptisch-tabellarischer Grundlage*, Teil II. *Von Justinus II. bis Phocas (565-610), einschließlich der Prägungen der Heraclius-Revolte und mit Nachträgen zum 1. Band,* (Wien, 1975), S. 131: no. 65b.

（11）もしくは「Fel(icium) Temp(orum) Reparatio（幸福な時代の再建）」。

（12）RIC VIII, p. 528: no. 190. Cf. Ibid., p. 37.

（13）Michael Hendy, *Catalogue of the Byzantine Coins in the Dumbarton Oaks Collection and in the Whittemore Collection*, vol. IV, (Washington D. C., Dumbarton Oaks Research Library and Collection, 1999), pp. 236-238: no. 40a.

（14）もしくは「Fel(icium) Temp(orum) Reparatio（幸福な時代の再建）」。

（15）RIC VIII, p. 454: no. 81. Cf. Ibid., p. 37.

（16）ないしは「ϖ̄」。

（17）表面四行目に読んだ文字「Ṣ」は「ϖ̄」の可能性もある。以下、この両者に場合分けした上で、表面後半の読みについて述べておきたい。

まず四行目の右から二文字目が「Ṣ」の場合、これは「καὶ」を表すため、この文字より前の部分に爵位名、後ろの部分にもう一つ爵位ないし役職名が来ることとなる。三行目最

後の「R̃=β(ασιλικῶ)」（皇帝の）に続く四ないし五文字分のスペースに当てはまる文字列を持ち、なおかつプロトノタリオスとの組み合わせが知られているのは、例えば「カンディダトス κανδιδάτῳ（[ΚΑΝΔΙΔ]）」、「マンダトル μανδάτωρι（[ΜΑΝΔ]）」、「プロトスパタリオス πρωτοσπαθαρίῳ（[ΑΣΠΑΘ]）」、「スパタリオス σπαθαρίῳ（[ΣΠΑΘ]）」、「ストラトル στράτωρι（[ΣΤΡΑΤ]）」、「ベスティトル βεστήτορι（[ΡΕΣΤ]）」などである（各々の括弧内に、既存の例に基づく復元の一案を示した）。一方で二つ目の爵位ないし官職であるが、「ε」から始まり四、五文字空けて「υ」を含む文字列を構成しうる名前はそれほど多くはない。既存の事例において多く確認されるものに「エピ・トゥ・クリュソトリクリヌ ἐπὶ τοῦ χρυσοτρικλίνου（例えば Ε | [ΠΙΤΧΡ]V | [ΣΟΓΚ]）」があり、また「エピ・トゥ・ミュスティク ἐπὶ τοῦ μυστικοῦ（例えば Ε | [ΠΙΤΘΜ]V | [ΣΤΙΚ]）」や「エピ・トン・クリュソテロン ἐπὶ τῶν χρυσοτελῶν（Ε | [ΠΙΤΧΡ]V | [ΣΟΤΡ]）」も可能性がある。

以上二つの爵位・官職について可能性のあるものを列挙してきたが、前者のうち「皇帝のプロトスパタリオス」は後者の三つすべてとの組み合わせが他の封鉛史料から確認されている。また「皇帝のスパタリオス」も、「エピ・トン・クリュソテロン」以外の後二者との組み合わせが確認される。従って、既存の事例に照らすならば、可能性があるのは「皇帝のプロトスパタリオスおよびエピ・トゥ・クリュソトリクリヌ／エピ・トゥ・ミュスティク／エピ・トゥ・クリュソテロン」、ないしは「皇帝のスパタリオスおよびエピ・トゥ・クリュソトリクリヌ／エピ・トゥ・ミュスティク」となろう。これらのうち、最も事例が多いのは「皇帝のプロトスパタリオスおよびエピ・トゥ・クリュソトリクリヌ」である。ただ、我々に未知の爵位・官職の組み合わせである可能性も排除できない。

他方で、先に述べたように表面四行目の右から二文字目は「ῶ」の可能性もある。この場合、この「ῶ」は何かの省略形（の一部）と考えられるが、一つ目の爵位の語尾（ないし一部）をなすのかどうか判然とせず、なにかしらの復元を行うことはできない。

(18) 村田光司「トロス司教座聖堂発掘報告（二〇一三）―出土貨幣及び封緘について」『史苑』七四―二（二〇一四）、一五八―一六七頁：一六〇―一六三頁を参照。

(19) 未使用鉛については村田光司「トロス司教座聖堂発掘報告（二〇一四）―出土貨幣及び封緘について」『史苑』七五―二（二〇一五）、三四六―三五五頁：三五一―三五二頁を参照。

〔追記〕本稿脱稿後、封鉛①の高精細な写真を閲覧する機会を得た。表面四行目、右から二番目は明確に「S」と読め、また五行目の「V」の直前に「M」の右端と思しき垂直の線が確認できた。以上が正しいとすれば、本稿註一七で提示した読みの可能性のうち残るのは「皇帝の（プロト）スパタリオスおよびエピ・トゥ・ミュスティク」のみである。しかし一方で、既存の事例に照らせば「エピ・トゥ・ミュスティク」は中央の官職であり、地方の役人がこれを兼務できたのか疑問である。詳しくは近刊の英文報告書を参照。

（日本学術振興会特別研究員ＰＤ）

Tlos, Basilica Excavation Report, Tlos, 2016: Coins and Seals

MURATA, Koji

In this report we report nine coins and two seals found at the Basilica at Tlos in 2016.

Coins

1. Valentinian II. Siliqua (Trier, Lyon, or Aquileia. Date struck: 378-383)
2. Valentinian I, Valens, or Gratian, AE3 (Antiochia. Date struck: 364-375)

3. Valentinianus II or Theodosius I, AE2 (Constantinople. Date struck: 383-388)

4. Phocas, Half Follis (Constantinople. Date struck: 603-610)

5. Constantius II, AE3 (Antiochia. Date struck: 355-361)
6. Bronze Coin (?), chipped.
7. Alexios I, Copper Tetarteron (Thessaloniki. Date struck: 1092/3-1118)
8. Bronze Coin, worn.
9. Constantius II, AE2 (Constantinople. Date struck: 348-351)

Seals

1. Lead Seal of Constantine, imperial [...] and protonotary of the Kibyrraiotai theme (10-11th C. ?)
2. Lead Blank